

歌碑

文化

寺社

南阿蘇って

石橋

いいな

板碑

点在する文化財を訪ねて

(随時掲載)

神体

伝説

歴史

アッ、やっぱり放牛さんだ

わが家の窓を全開したら、入ってくる風は生あたたかくなっていました。

これで大地が息吹き始めたなと感じたある日、自分の体もじっとしていらなくなつたため、カメラを片手に家を飛び出しました。

今回訪れたのは河陰地区で、南外輪山中腹を東西に縦走する林道を、春風に誘われるままに歩いてみました。

空高く舞い上がったヒバリが、春の訪れを喜び乱舞しながらの鳴き声を耳に、北の方に目を移すと美しい阿蘇の山々が悠然と横たわっており、その姿は私たちを大いに魅了



放牛さんが彫った見事な阿弥陀如来立像です。(くま熊の高さは約50センチです)

するものがあります。

昭和天皇が、全国植樹祭に参加のため旧俵山道路を通行された際、急ぎよ当時の細川県知事ともにお車から降りられてまで、この素晴らしい景色を堪能されたということでした。

この、お車から降りられるという行動は、その日の行動予定になかったことから警備関係者は青ざめたというエピソードが残っているそうです。確かに誰が見てもこの景色には心打つものがあります。南阿蘇っていいな「そんな誇らしさに心が満たされて歩くなか、道路北側に小さな祠を見つけました。

道路に背を向けて建ててあるため中にどなたがいらっしゃるかわかりませんが、

ひよっとするとうわさに聞いているあの方ではと、ソーツと回り込んで覗いて見た途端「アッ、やっぱり」。

実は、南阿蘇村教育委員会からお借りした資料によ

りますと、この石仏は江戸時代の中期に現熊本市に住んでいた「放牛」というお坊さんが彫ったとされています。飢饉や災害で亡くなった人々の供養をするために、享保七年(1722年)から11年間で118体の石仏を彫り、県内各地に安置されたそうです。

このうち98体が現存し、そのほとんどが熊本市で確認されていますが、熊本市以外での発見は18体ほどで、なんと阿蘇郡内では唯一ここだけです。各地の石仏は「放牛地藏さん」として、地域で親しまれて続けてきました。数年前には、県内の研究者らで「放牛石仏を守る会」が設立され、石仏が現存する地

域のみなさんと協力しての保護活動が進められています。改めまして現物を見てみると、やっぱり間違いなく放牛さんの作品です。資料によりますと、118体のうちここは35番目と記されていますが、その「三十五番」という字が光背の裏側に

見とれます。正面から見ると高さ120センチ以上の見事な彫りの石仏で、如来の特徴でもある髪の毛が縮れて粒状になって、螺髪まで忠実に彫ってあります。となれば、各地で言われている地藏さんではなく、如来像となります。残念ながら両手首が欠落しており即断が難しいのですが、資料でも阿弥陀如来と結論付けており、放牛作には数少ない「阿弥陀如来立像」ということになりました。

また、光背左側に「他力熊本 願主放牛」が読みとれ、放牛作の証拠となっています。さらに放牛は怒りや悲しみ

このからもみなさんの身近にある文化財を紹介していきますので、私が訪ねましたときには、取材・撮影などにご理解とご協力をお願いします。特に文化財にまつわるエピソードなどご存知の方は、私か村教育委員会まで早めに知らせていただければ助かります。

「記事と写真」 熊本県文化財保護指導委員 笠野 次雄

の歌を石仏に彫り込んだといわれており、それが光背上部にかすかに見えますが、何と書いてあるかまでは判読できません。彫られたのは、享保12年(1727年)ということと、290年近くもこの南阿蘇の変遷を見守っていらっしやることになりました。

もう一つ疑問が残っているのに、昭和12年ごろまでは200メートルほど山手に在ったとされていますが、そもそも放牛さんはなぜこんな人里から離れた山の中腹に、大きくて重く、しかもこれほど立派な石仏を持ち上げ安置されたのでしょうか。そんなことを思うと想像できる場面は無限に広がりますね。

今日は、歴史も確かな放牛さんの作品に会えて気分は最高です。周りに誰もいないし誰も見えないから、スキップでもしながら帰ろつと。